

民族舞踊文化



No.7

1994年11月15日

THE MAYUZUMI FOUNDATION FOR TRADITIONAL FOLK DANCE

財団法人 黛民族舞踊文化財団

〒107 東京都港区赤坂3-10-3 黛ビル4F TEL03-3583-3633(代) FAX03-3583-3670



ミロク様と御一緒に（西表島・節まつり）

米と、日本と、民族のおどり

黛民族舞踊文化財団

理事長 黛 節子

古墳から出土する“^{ちみから}粳穀”には、たまらない懐かしさがある。

これをこの島国の人達は本当に食べていたのだろうか？
どうして方法で生きる糧としていたのだろうか？

私は、素朴な疑問をいつも抱き続けている。

しかし、我が国では、時代が下がると“石高”の文字が示す通り、お米が経済の基本となり、人々の地位や、生活水準にも影響を及ぼすこととなった。

多くの場合、お米を作る人々は、主食として口にするにとすら出来ず、年毎の豊作と飢饉の狭間で、聞くだにおぞましい悲劇が繰り返されてきたのである。

このように、お米が全てだった時代、作る人々は豊作を神に願い抜いて生きてきたのだと思う。それが一連の豊作祈願や、稲作儀礼として、今日残された民俗芸能（神楽、田楽等）の基になったと考えられる。

従って、我が国に残された民族の踊りの殆どが、稲作との繋がりの中で培われてきたと言っても過言ではないように思われる。現代ではおよそ考えられぬ苦しみに耐える力と、深い祈願があった筈であり、それ故に私は、日本の民族舞踊には、深い祈願のエネルギーがなければならないと思う。今年は何はともあれ豊作！めでたい！、と身も心も開放して生きてゆけそうです。



あらうれし
飢饉の中の
初のかゆ

1993年の夏は寒くて雨の多い夏でした。
案の定、私どもが怖れていた不作の秋
の訪れでした。

にもかかわらず、年中行事としての“七
草の宴”を豊かに催すことが出来ました。

これも平和の時代の有り難さと、深く
感謝しながら頂きました。

チンチンドンで不景気を吹き飛ばした滝の家一二三連

祝賀の乾杯 日本芸術文化振興会 加戸守行理事長



登呂の赤米と、奈良布留「石上神宮」からの新米で、紅白のお粥を炊きました。

皆様は、赤米のお粥に大変興味をお持ちのようでした。

“財団の七草粥を頂いて、いつも新年が来た喜びを知る”と皆様からのお言葉。



毎年1月7日は霜柱のジャリジャリに立った庭え降りて、精魂込めて御行、仏の座、はこべら等を、指の先まで痺れる冷たさを味わいながら摘みます。(これ等の草々の作り方は、財団育ての親、三井不動産の江戸英雄様の御指導を頂きました)

“しんしや”の茶碗に盛りつけるお粥に、皆様ご自分でまっ青な七草をお入れになり“美味い!”“美味しい!”とって召し上がって下さる。

一年の年の豊かさを祝う、いかにも日本的な行事です。



当財団の研究課題である「稲作文化と民族舞踊」は、先ず傣族の研究から始まりました。本年は中国側の協力により、日本人として初めて壮族（米作少数民族の代表）の村落を訪れることが出来ました。その時の取材班の皆様から、手記が送られてきたので御紹介します。

尊敬する黛節子先生 雲南省舞踏家協会
副秘書長 張 亞 錦

ご帰国から長い日がたちました。
新聞の記事二つを同封しました。文山の人民の思い
出を表しています。
今後とも是非いらっしゃって下さい。これは必ず中日
人民の友誼に貢献出来ると思います。
万事順調なことを祈ります。



訪中国を出迎えてくれた壮族の人達

壮郷での出会い

中国雲南文山州文化局
梁 宇 明

壮族特有のいい香りのする強い米酒



ハンケチ舞

日本黛民族舞踊文化財団文山訪問

1994年3月29日から4月2日までに、日本の著名な舞踊家、黛節子先生を始め日本黛民族舞踊文化財団一行6名は、雲南省文山壮族自治州に、友好訪問と交流出演を行いました。その時の幾つかの思い出を記録しました。

手が舞い、足を踏む

黛節子先生は、日本で広く影響を与える民族舞踊家です。同時に国際舞踊界の権威ある人物です。今も国際民族芸術委員会後援委員会の副委員長を兼ねていらっしゃるのです。

彼女と彼女の一行は文山に着くと、疲れを忘れて、その晩文山州民族歌舞団の民間民族舞踊「七郷風采」をご覧になりました。「七郷風采」は州民族歌舞団が、昨年文山国際三七節を祝う為に出演した、滇南歌舞の抜粋です。

第一回昆交会の専門出演演目にも指定されました。ベトナムでも好評でした。その晩公演中、舞台美術の壮苗風景や綺麗な民族服装、趣のある民族風俗など、黛先生は大変興深くご覧になりました。文山特有の傣族舞踊を見るとき、黛先生は“中国の民族舞踊も、我々日本のものとよく似ていますよ”と言いながら舞台の音楽に合わせて踊られました。「豆を磨く」という踊りを見たとき、先生は舞踊に反映された生活の叙情に感動され、思わず立ち上がって“素晴らしい、素晴らしい”と言われました。終わるとき、先生は舞台の入り口で下駄を脱ぎ、踊りながら出演者の行列に入り挨拶を交わされました。感情に溢れた、誠に異例のお祝い方式でした。

最後は壮族副州長とも共に踊りました。



中国の刺繍靴と日本のハンカチーフ

ここは千近い所帯の村です。小広南といいます。今日はとても賑やかです。

千人以上の壮族の人々が、綺麗に盛装して、獅子舞やハンカチ舞を踊ったり、武術を見せます。壮族の人達は、壮族特有の慣習で日本の芸術家を迎えました。お客さんが玄関に入ると、甘水、甘茶、甘酒を出し、席に着くと米のお菓子、チマキ、餅等を出しました。

庭では餅作りのための餅の香りが漂っていました。

黛先生は、娘達が覆いた舟の形の刺繍の靴を指して“こんな立派な芸術品で土を踏むのは勿体ない”といわれました。周りの人々は“壮族の女性は、お祭りの時は皆覆きます”と言いました。

3月30日午前、黛先生をはじめ、黛舞踊文化財団の一行は、自治州の政府高官を訪問しました。政府側の任勇さんが地元の壮族であることを聞いたとき、黛先生は目を輝かせて“私は任副州長の踊りが見たい”と言われました。

その夜8時、壮郷苗嶺の舞台に初めて日本の歌舞の音楽が響きました。

1時間あまり、14の演目は日本の叙情に溢れたものでした。その民族の個性は観衆を引きつけました。

最後、黛先生と他の舞踊家達は、州歌舞団のメンバーや、文化局の局員を舞台に誘って一緒に踊りました。

雰囲気は最高潮に達したとき、副州長も舞台に連れ出されました。

舞台上には喜びの舞踊、舞台の下には情熱の拍手が沸き上がりました。

中日芸術交流の新しい一頁を遠い南の土地で書き添えました。



すっかり仲良しになったおばあちゃん

手作りの靴を贈って下さったお友達

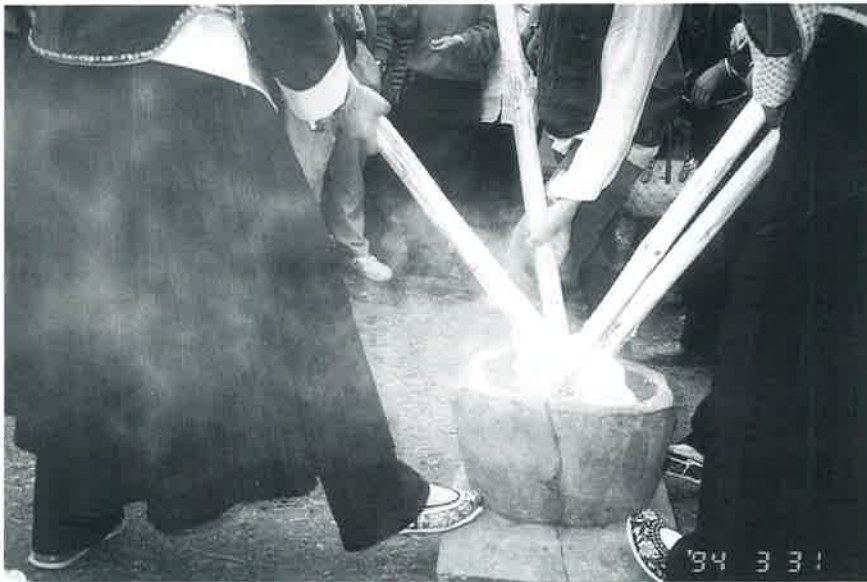


そのとき黛先生と同年代の女性が、にこにこ笑いながら、黛先生の頭を壮族のように包み、一足の新しい刺繍の靴を渡しました。そして通訳を通して“これは日本の姉妹へのプレゼントです”と言いました。黛先生は信じられないように、刺繍の靴を握って、その目からは涙が溢れてきました。

黛先生はその女性に日本のハンカチーフを贈りました。

その女性がハンカチーフを拵げてみると、そこには“黛節子”の文字が縫ってありました。この三文字は日本文字ですが、中国文字でもあります。日本人は勿論読めますが、中国人もわかります。

雲南民族報 1994年5月23日



3月31日、穏やかな春の日の午後、黛節子舞踊団一行は、雲南省文山州壮族の村——小広南に到着しました。春雨に洗われた木々の緑の美しい村です。

遥か遠い桜咲く国からの賓客とあって、村を挙げての歓迎でした。

一行の車が村の入り口に近づくと、ドラと太鼓を叩き、獅子舞を踊りながら迎えたのです。

彼らは舞踊団のメンバーの手をとり、親しげに挨拶を交わしました。そして一行を取り囲むようにして村え入っていきました。

村の中央、村役場の前には、綺麗に盛装した壮族の女性達の一団が、米のお酒を手にして待ち受けていました。

彼女達は、酒の祝い歌を歌いながら、芳香を放つ彼等自身の手で作られたその酒で客をもてなしました。

その後、一行を家の中え招き入れました。

家の中の居間の中央には、大きな机が二つ並べられ、その上には五目花糯米御飯、香りのするチマキ、米花、米酒等、壮族の食物がいっぱい並べられていました。

壮族の食文化の豊かさと、特徴を感じさせるものでした。

日本からの賓客は、興味深くこれ等の食べ物を口にし、そして褒めました。

黛先生は、通訳を通して“日本にもチマキや花糯米御飯、米花等もありますが、壮族の方が美味しいです”といわれました。

記者が彼女に“中国人がチマキを食べるのは、中国古代の偉大な愛国者で詩人でもある屈原を記念するためです”と説明すると、彼女は真面目に聞きながら、“今まで中国のチマキの歴史が分からなかったが、これからは、チマキを食べるとき、屈原を思い出します”といわれました。

壮郷の印象を尋ねると、黛節子さんは“もう4回雲南に来ましたが、壮郷の風景は初めてです。でも独特の風習、綺麗な景色がとても印象的。機会があれば必ず又きます。”といわれました。そして突然、日本語で喜びを表す日本の民謡を歌い出しました。黛節子さんの歌を聞いたメンバーの野宮節子さん、日川菊子さん、四宅豊次郎さん等も即興で踊り出し、友好の雰囲気が大きく盛り上がりしました。

夕日が大地を金色に染めました。黛節子さん達は、壮族の餅作りや、機織りを興味深く見てまわりました。又彼女達は疲れを忘れて、壮族の少女達の踊りの行列に入り、一緒に踊りもしました。

夜の幕が降りて、彼女達は止むを得ず壮郷を離れなければならませんでした。

親切な壮族と別れ車に乗りました。黛節子さん達は絶えず振り返り、その目は別れがたい表情で一杯でした。

「文山報」1994年5月1日

願壯乡苗岭和富士山 歌声交融回响

文山壮族苗族自治州文化局

梁宇明

一九九四年三月



文山州民族歌舞团で「はねこ踊り」を教える

1994年3月23日～4月4日訪中国（3月31日壮族の村での日中舞蹈交流



壮家人的米酒！”

在文山州第二届民族节期间，专程到文山回访的日本国策子舞蹈文化采风团也参加了表演。热情好客的壮家儿女，用特意酿造的米酒欢迎远道而来的客人。宾主互祝中日两国人民世代友好相处。

〔刘道一 摄影报道〕

『ありがとう、壮族の米酒ありがとう。』

文山州第二回民族節期間に文山を訪問する日本国策子舞蹈文化財団も出演に参加しました。お客さん好きの壮族の人々は特に用意した米酒で遠くから来たお客さんを迎えました。主客は杯を挙げて、中日両国人民の子々孫々友好のために祈りました。

黛 節子

この日の演目は、韓国のサルプリを取り上げました。

どちらかというと地味な主題ですが、元々日本の巫子の芸能を研究し、作品も幾つか創ってきた私にとって、韓国に於ける巫女芸の研究は避けて通ることの出来ない課題でした。

サルプリ舞の丁明淑さんをお招きしてのトーク・パフォーマンスは、踊りと対談による新しい試みでした。

例え1時間半のプログラムとはいえ、準備から公演終了まで、神経の休まる暇のない日々でした。

でも、御来場のお客様方に、こちらの意図したメッセージを、理解して下さいように思いました。

黛アート・サロン「韓国の舞踊・そのⅡ」は、'94年 6 月22日(水)午後7時より韓国のサルプリ賞受賞者、丁明淑女士を迎え黛節子の司会で、対談と舞踊の組み合わせによるパフォーマンスを開催しました。

丁明淑先生のプロフィール

韓国重要無形文化財

第97号サルプリ踊り

準人間文化財

社団法人 韓国舞踊教育会理事

高麗民族舞踊研究院代表

社団法人 韓国舞踊協会理事



韓国民俗舞踊 サルプリ

サルプリ——本来、厄払いの意

サル——死者の怨念による厄や悪運。

プリ——解く、取り除くの意。

サルプリ・クツという邪気払いの巫女儀式の名称を指す。

朝鮮半島南西地域(全羅道)の巫俗儀式。つまり巫女の邪気払いの儀式で行われる舞踊です。(その習俗を基に、舞台芸術化されたもの)別名散調舞、即興舞とも称ばれ、通常舞手は一人です。白のチマ、チョゴリの衣裳に、柔らかく薄い白布を持って踊ります。この白布は、丁度我が国の奈良朝時代の女性が身に纏っていたひれに似たものです。

巫女の範疇から言えば、一種の呪術の小道具とも言えましょう。その布を翻しながら舞うのです。

民俗舞踊の白眉といわれ、芸術性の高いものです。

同じく韓国に於ける男巫女が舞う僧舞と対象的な舞踊といえます。

ひれを遣い、流れる如く、或いは止まるが如く舞う美しさは、荘厳な巫女儀式の様相を彷彿とさせるものがあります。

最初はサルプリの音楽、クッコリ・ジャンダン(ゆっくりとしたリズム)に乗って踊り始め、次第に舞踊手の心が高まるにつれ、リズムも早くなり、神懸かり的な神秘性ともなった踊りになります。リズムもチャチン・モーリと称ぶものになります。神懸かりの状態から、厄を払い幸せを呼ぶ心情で踊ると、再び元のクッコリ・ジャンダンの音楽に戻ります。

舞手が手にする白布は、天と地を表し、下界と上界を意味します。

布を落とした場合は、不運の極の厄を意味し、取り上げて手にした場合は、幸運の喜びを表すといわれます。

白布を翻す動作は、いかにも邪気を払い、厄払いをする巫子の様相を、見る人に訴えます。



未央、柳
ミ
ア
ウ
やなぎ
前漢武帝宮殿名

橋岡久馬先生より 手折られた花未央・柳

黄色の花びら5枚
中央に細い黄色のひげ
ひげの先が小さいまま
になっている
葉は少し厚い



→ サルブリのトーク・パフォーマンスにお出ましの、観世流橋岡久馬先生（写真左上）と、そのとき先生のお庭から直にお持ち下さった、未央柳を節子がスケッチしました。

立舞 イップ チュム

これも民俗舞踊の代表的なもので、チマ・チョゴリとは違ったコスチュームで踊られます。小道具は持たず、韓国女性の美と情熱を表す大変内容豊富なものです。

リズムはサルブリでも使われたクッコリ・ジャンダンで、静中動あり、動中静ありの動きです。

これは、舞楽の舞心、即ち静中動、動中静に通じるものがあります。

因みに舞楽の右舞（高麗楽）は朝鮮半島の高麗から渡来したものとされています。



雲南省少数民族舞踊家招聘公演 ライス・ロードの舞踊家たち

1994年8月1日～11日

中国雲南省舞踊家協会代表団名簿(6名)
(ライスロードの舞踊家 1994.8/1～8/11)

顧問 那家佐 雲南省文学芸術界連合会副秘書長
(作家)

団長 聶乾先 雲南省舞踊家協会常務理事
雲南省舞踏研究主任

副団長 劉太平 雲南省舞踏家協会常務理事
雲南省文芸学校舞踏科主任

団員 和寿春 雲南省舞踏家協会理事
麗江地区群衆芸術館館長

団員 施松建 雲南省舞踏家協会会員
麗江県民族歌舞団振付、演出家

団員 李錦榮 雲南省舞踊家協会会員
昆明市五華区青少年宮補導部主任
振付・演出家



8月3日午後1時半から黛アートサロンで雲南省少数民族の生活と踊りのゼミナールを行いました。訪日代表団の方々と中国の少数民族の風俗研究家である萩原先生と中国の少数民族舞踊に深い造詣を持っている黛先生の討論の形で行いました。日中両国人民の生活習慣、年中行事、お祭り、冠婚葬祭、文化芸術及び宗教、信仰など幅広い分野について話し合いました。

1、稲作文化

田植え祭り、(白族、傣族)

豊作を祈り祭り(傣族の芒鼓舞、サニ族の松明祭り)

収穫祭(新米舞、豊作舞)

2、年中行事

お正月(傣族の水かけ祭り、苗族)

3、宗教行事

冠婚葬祭(傣族の賛哈、苗族の花灯節、ナシ族の東巴舞)

4、東巴文化

ナシ族の精神文明の集成、汎神論、自然は神様であり、万物に神様が宿っている、魂の不滅などと信じている。

東巴は賢い人の意味のナシ族語である。シャーマンの役割を担当している。葬式、天災、病気のときの悪霊払いなど。

東巴舞(神の踊り、動物の踊り、戦争踊りなど)

5、生活ぶり

風俗習慣(傣族の魚捕る舞、リス族の生産舞)

6、日本の伝統芸能

日本の能について(ワキ、ワキヅレ、囃子などについて)
歌舞伎



松本日中友好協会主催

会長 穂苅甲子男

日中舞踊交流の夕べ



オーパチュアで博多節を踊る黛 節子



メンバーを紹介する黛 節子

ライス・ロードの舞踊家一行は、長野県松本市の松本日中友好協会（穂苅甲子男会長）のお招きで松本市を訪問し、「日中舞踊交流の夕べ」の会に出演し、交流の絆を深めました。

又、その後群馬県桐生市を訪れ、第31回桐生・八木節祭りに参加し、ここでも交流の実績を上げました。



桐生・八木節祭りの山車の上で、樽を叩き鼓をポンポン打ったり、今習った八木節を踊ったり、すっかりはしゃいだライス・ロードの舞踊家たち。

第31回桐生・

八木節祭りとの交流

傘と笠を中心とした交換会。少数民族舞踊に対する珍しさと、急彩の美しさに皆さん大感激。





黛アート・サロンの ファッションショー

黛アート・サロンに於ける衣裳パレード
当財団にも少数民族の衣裳コレクションが、大分溜まりました。写真は民族衣裳を着ける劉太平 女史。

雲南省少数民族舞踊家(ライス・ロードの舞踊家たち)



聶乾先

和寿春

李錦榮

施松建

劉太平

那家佐

民族舞踊文化 No. 7

1994年11月15日発行 発行人 黛 節子 編集 大野 晃

〒107 東京都港区赤坂3-10-3 黛ビル4F

Tel 03-3583-3633(代)
Fax 03-3583-3670

財団法人 黛民族舞踊文化財団

特別頒価 ¥1,500

THE MAYUZUMI FOUNDATION FOR TRADITIONAL FOLK DANCE

MAYUZUMI BLD. 4F, 3-10-3, AKASAKA, MINATO-KU, TOKYO